



「風の四季」



「照明」



「未知への展望」



「B-cushion#27」



NO.39 2002.12

aaca

社団法人 日本建築美術工芸協会

アピアランス



aaca会員 有限会社ビー・シー・キジル
 創画会会員
 日本画・ステンドグラス
 SHIBATA NAGATOSHI
柴田 長俊
 長野県北佐久郡軽井沢町長倉字千ヶ瀬3974
 TEL0267-46-4550

「風の四季」
 軽井沢病院
 2937×5172337×236

手吹きのアнтиークガラスには吹いた人の気持ちが映る。日本画の絵具からは得られない透明感。鉛線とガラスでどうやって自分の線を出そうか。外と内をつなく風景として、ステンドグラスをイメージするのがとても楽しい。



aaca会員
 鍍金を主とした造形
 MINAMISAWA NATSUKO
南沢 奈津子
 神奈川県津久井郡藤野町名倉300-1
 TEL0426-87-6439

「照明」
 65×30×20

素材の持つ質と、そこから探した「かたち」の調和を求めて。あかりをともした時、和んだ空気が漂うこと、様々なイマジネーションが広がることを願っています。



aaca会員
 漆芸
 AKABORI IKUHIKO
赤堀 郁彦
 横浜市栄区柏崎18-4-103
 TEL045-893-7572

「未知への展望」
 1500mm×1150×50

この作品は、漆の壁面装飾として制作したものです。広大な宇宙に向かっていく物体が大気圏に突入するとき、大変な衝撃が起ります。これは現代社会の組織の中にある空しさと同じです。技法は、漆・ステンレス・金箔等。



aaca会員
 美術家
 CHO HARUKO
長 はるこ
 臨島区西池袋2-31-6
 TEL03-3989-8608

「B-cushion#27」
 150×200cm

自作の布のオブジェを結んだり、捻ったりしてできる形を平面に表現するためにネパールの分厚い口クタ紙にNECOという手法で、あえて走査線を粗く露呈することによって、横稿状のイリュージョンで覆われていく、温もりの内包された作品を制作しています。

CONTENTS

文化・芸術と都市空間	1
時代の華一輪	4
aacaトーク	6
内井昭蔵先生の思い出	9

■表紙デザイン

高部 多恵子

表紙の作品を募集しています。
 事務局までお問い合わせください。
 尚表紙のレイアウトは、広報委員会で行います
 のでご了承下さい。

発行：観日本建築美術工芸協会
 Phone03-3457-7998
 Fax 03-3457-1598
 〒108-0014
 東京都港区芝5-26-20
 建築会館6F
 URL: <http://www.aacajp.com>
 E-mail: info@aacajp.com

郵便振替：00110-2-365085

編集：(社)日本建築美術工芸協会 広報委員会

広報担当理事 柳澤孝彦

委員長 玉見 満

副委員長 高部多恵子

北村孝昭、石田眞人、山崎輝子

長谷川亨、瀬川秀之、佐田興三

事務局 長 伊藤留雄

制作協力：中栄印刷工業株式会社

一商いと都市空間一

■虹見ゆる処市を立つ

虹が立ったら市をたてなければならぬ一古代から中世の日本ではそう云われていました。

中御門右大臣・公卿藤原宗忠の日記『中右記』の寛治六年（1092）には、「抑々世間の習、虹見ゆる処市を立つ」とあります。康永三年（1344）六月に花山院、貞治三年（1364）二月に四条室町、応永五年（1398）八月に興福寺などと、虹が立ったため市が開かれた記録が残っているようです。

歴史学者の勝俣鎮夫氏や網野善彦氏によると、中世では、物には所有者の心が籠っていると考えられていたため、そのままでは物の交換が贈与互酬の関係になってしまい、商品としての売買になりません。そこで、物を世俗の関係の切れた「無縁」の場、人の力の及ばない神仏の空間に一度放り込む必要があったとされています。

「市は地上におけるひとつの小さな虹」と、哲学者の中沢新一氏は解釈しています。虹は大地に秘められてきた力を大空に解き放ちます。神仏の世界と俗界との架け橋です。

故に人は、海と陸、山と平地、道と道など異界との境、神聖なる場所に市を立ててきました。そこでは世俗の「結び」はほどかれ、神仏による、あらたな結び

直しが行われていきました。

■市の伝承は中世の経済システム

現代社会の出発点は、都市が各地に姿を見せ始めた中世（12～16世紀）にあるといわれています。中世は、言語、文化、あらゆる面で多様なものが混在し、共存していました。

中世では専門化した商人はまだまだ少なく、多種多様な人びとが世俗の「結び」がほどかれる市で、神に齋祀するため、盛んに交易売買を成し、芸能を催し、歌垣を行っていました。南北朝時代の『庭訓往来』には、市に集う人々として、酢造り、沽酒、蚕養、染殿、綾織、紺掻、炭焼、獵師、樵夫、海人、鍛冶、鋳物師、巧匠、壁塗、石切、轆轤師、塗師、絵師、仏師、木道、弓矢細工、笠張、縫物師、陰陽師、修験行者、上人、医者、舞々、傀儡師、白拍子…と、実に80種近くの職が列記されており、その中にはaaca会員のルーツともいうべき人びとも見られます。

中世は国家が正規の貨幣鑄造を行わなかった時代でもありました。商いで、物品と併用されていた銭貨はこれまた多種類の輸入物で、基本的には種類にかかわらず全一文でした。

度量衡も多元的で、本秤、国秤、蔵人秤に加えて、民衆は日常の必要性から自分たちの秤をもっていました。長さを測る物差しも、容積を計る杓も、地域ごとに、職種ごとに違っていたようです。

このような中で展開されていた市は、市神を祀る市祭が行われることによって、初めて起動していました。市は神仏と交流できる季節、時間（朝と夕）に開かれることが多く、1年ごとに初市と立

ち納めを繰り返す「円環的な時間」の中にありました。毎年の市祭は、市に集う人びとの共同関係を更新する儀式でもありました。また、新市を立てるには、親市から土を盗んで敷いたり、市神を勧請する習わしがあり、それにより、全ての市相互の関係が秩序づけられていたようです。

中世では、神仏に支えられたこのような市の伝承が、多様性を包括するひとつの経済システムとして機能していました。そして、それを成り立たせていたのは各地を商う人びとでした。

■「見えざる手」の及ばない市場経済

かつて神仏に支えられていた市は、今では自由経済の名の下に、莫大な金融資本が動く巨大市場に膨れ上がっています。近代市場経済では、すべての生産物は勿論のこと地球資源や非物質的なもの（学問、芸術など）までが、貨幣を媒介にして、商品となり、商われています。

今や世界の金融市場は連結され、瞬時に膨大なマネーが世界を駆け巡り、自己増殖を遂げる「マネー経済化」の時代になっています。

驚くべきことに、地球上に存在するすべての国のGDP（国内総生産）の合計が約30兆ドル、世界中の輸出入高はわずか8兆ドルにすぎない時に、世界で年間300兆ドルものマネーが流通しているそうです。

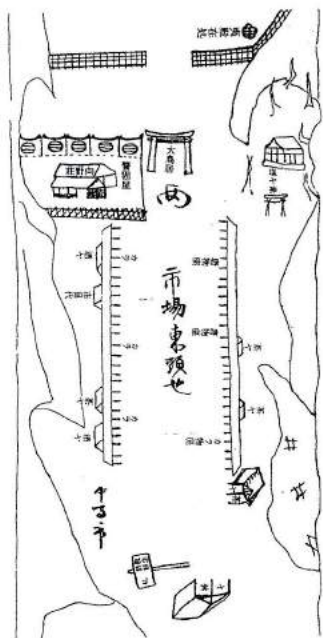
近代の経済システムは、私たちの手はもとより、アダム・スミスの「見えざる手」すら及ばないところで、暴走し、暴力化しているように思えます。市場で売買されているほとんどの商品の、作り手たちの顔を私たちは知りません。大量生産、大量消費、大量破棄のツケは、環境破壊、地域格差、コミュニティ崩壊、均一社会、エネルギー問題…と、噴出していきます。

21世紀が始まったその年に起こった、世界貿易センタービルへの自爆テロは、象徴的な出来事だったように思えます。

■『モモ』からのメッセージ

ミヒャエル・エンデ（独1929～1995）の『モモ』（1973）は、あらゆる世代の人たちに愛され、30カ国語以上に翻訳され、世界で600万部が発行されたファンタジーです。

ヴェルナー・オンケン（独）は、この『モモ』の裏側に、現代の経済システムに対するエンデの問題提起があることを最初に気づいた経済学者です。少し『モモ』の要約を記してみます。



応永20年（1413）の市庭
宇佐八幡宮末社和開浮殿放生会絵指図（部分）（『大分県史』第7巻）（桜井英治『市の伝説と経済』より）



中世の商人（五番本、徳江家蔵『東北院観人歌合』）
（石井進『商人と市をめぐる伝説と実像』より）

大きな都会のはずれの小さな円形劇場の廃墟に、モモと名乗る一人の女の子が住みつきます。モモは、人の話に耳を傾けることで、人びとに自分自身を取り戻させる不思議な力をもっていました。ところが、ある日、「灰色の男たち」が現れます。時間貯蓄銀行から来たその男たちは時間泥棒で、時間を節約して銀行に預ければ、利子がついて、将来は素晴らしく多くの時間が自由に使えると、人びとを言葉巧みにそそのかします。時間を節約し始めた人びとの生活は日ごとに貧しく、画一的に、冷たくなっていきます。大都会の様子も変わっていきます。無駄のない同じ形の灰色の高層住宅、同じ道路…。モモは灰色の男たちと必死で闘い、盗まれた時間を取り戻します。

地球規模の解決できない問題の数々を次世代に先送りしている現実、利潤追求と生産効率化の名の下に、時間泥棒た

ちに操られている結果かもしれません。

■3つの地域の取組み

ここで、「商い」を背景にした今の時代の3つの事例をご紹介します。東京・丸の内、熊本・水俣、神田・岩本町と、それぞれで活躍をされている方々に原稿をお願いしました。

【東京・丸の内再開発】

丸の内は、明治27年に日本で最初の近代的オフィスビルができて「一丁ロンドン」と呼ばれるのに始まり、大正、昭和と常に近代的ビジネス街のシンボルとして親しまれてきた地域です。しかし、世の中の推移とともに、サラリーマンばかり、(女の子たちに「どぶねずみ色」と称されるような)が目立つ均一の街になってきた傾向がありました。それが、ここ2~3年の間に、オシャレなカフェも登場し、世界のブランド店が軒を並べ始めました。

【熊本・水俣元気村のもやい通貨】

公害の原点といわれる水俣病が発見されたのは1956年のことです。水俣病は人の体のみならず、心も、地域さえもずたずたにしてしまいました。しかし、近年、水俣では「もやい直し」が進み、地域を豊かにする動きが活発です。そのような中から、地域通貨のひとつ「もやい通貨」が生まれてきました。

【神田・岩本町の藍染稲荷】

岩本町は江戸時代から職人と商人の町でした。明治、大正、昭和も震災前までは、落語に出てくるような向こう三軒両隣、棟割り長屋が軒を連ねていました。そのような長屋は路地で結ばれており、路地ごとにお稲荷さんが祀られていたといえます。今では高速道路にはさまれて、細いビルの林立する、夜間人口の少ない街のひとつ隅で、お稲荷さんを守っている方がいます。

【東京・丸の内再開発】

三菱地所株式会社ビル開発企画部 恵良隆二

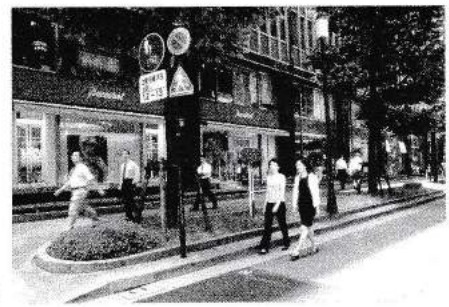
現在、丸の内には4100社、24万人の就業者が活動している。進展するポータレスエコノミーと高度情報化等の社会経済環境の変化に対応し、活力と魅力ある都心形成が期待されている。東京都、千代田区、JR東日本、大手町・丸の内・有楽町再開発計画推進協議会の4者で構成される「まちづくり懇談会」では、まちづくりの目標として、「時代をリードするビジネス」「人びとが集まり賑う」「情報化時代に対応した情報交流・発信」「風格と活力の調和」等を示している。

当社は、こうした考え方を踏まえ、丸の内の再構築に取り組んでいる。企業活動のポータレス化は、スピーディな意思決定と創造力を求め、ワークスタイルの多様化、付加価値の高いビジネスを生む環境を必要としている。「Open：人々に親しまれる世界に開かれた街」「Interactive：価値ある情報の受発信拠点」「Network：多様なネットワークを形成し成長する街」をキーワードに、ビジネス、ショッピング等の多様な活動の展開する街へ「新鋭ビルへの連続的建替え」「既存ビルのリニューアル」「街の運営・サービス」を具体的施策として進めている。

本年9月開業の丸ビルは、オフィスに加え、約140の店舗とホール・会議室・ビジネス倶楽部等の交流ゾーンが設けられる。丸ビル開業に合せ、丸の内仲通りの路面店の集積も進め、有楽町から丸ビルへの回遊性ある賑いゾーンの形成に務めてきている。又、情報化・交流空間形成にも取り組んでいる。先進的な社会人教育の場「丸の内シティキャンパス」、入居即ビジネスをスタートできる装備とサービスを提供するスモールオフィス「ビジネスセンター有楽町」、ベンチャー&起業

の支援組織としてスペース、資金、経営指導、法務・会計サポート等を提供する「丸の内フロンティア」。又、IT関連サービスとして、丸の内エリアを光ファイバー網でネットワークする「丸の内ダイレクトアクセス」、就業者の様々な要望に答えるコンシェルジュサービス「e-concierge」等に加え、丸ビル開業時には映像情報サービスとしてのエリア放送「丸の内ビジョン」をスタートさせる。

丸の内は、四季を彩るアメニティ空間に、国内外のショップやレストランが軒を連ねた賑いのストリートとして、又、ビジネス・学術・文化の交流拠点として、24時間、365日フルタイムに活動するグローバルビジネスセンターへと発展していくことを目指している。



丸の内仲通り

【熊本・水俣元気村のもやい通貨】

水俣元気村参加者 遠藤邦夫

もともと日本の田舎は「結い」や「もやい」で暮らしが成り立ってきた。近代の貨幣経済一辺倒によってそうとう仕組みは壊されてきたけれど、神社の掃除や用水路の整備や米作りではまだ活きている。

90年代からの水俣では、何をするにつけ住民参加・行政参加が当たり前となってきている。それぞれの人の意見が違っていることは前提だ。だから認識を同じくして何かやるのではなく、言い出しっぺが行動することを出発点とした。水俣の地域通貨「結い」もこうして始まった。

やりとりは、「手伝えること」「手伝って欲しいこと」を登録し、お互い連絡しあい、手伝いの後「結い券」を渡している。現在、190種のサービスの登録があり、76名(02.5.1現在)の会員がいる。



もやい通貨 (01.9.1より開始)

名称…「結い」

単位…100、500、1000結い
(基本は500/時間)

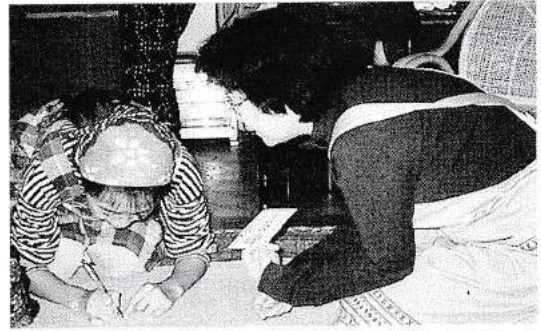
発行…10000結い/1人

方式…「結い券」の記録表に記入

運営…水俣市農林水産課が支援
(情報誌、もやい通貨メニュー発行)

やってみると、思ったもいなかったことが起きる。以下は皆の会話

「大豆引きを頼まれてですね、てっきり石臼で大豆を挽くものと思い込んでスカートでいったんです。そしたら畑で大豆を引っ張って抜く仕事だったんですね。(笑) 楽しかった、また呼んでね、って」
 「町から来てちょこちょこっと作業して『あー、気持ちよかった』なんて帰るなって、今までずっと思っていたんですよ。ところがですね、そうじゃないんだというのが分かりました。例えば1人の人が二時間ぐらいでも、入れ替わり立ち替わりやってくればそれはすごい量の労働力だと思うんですよ。もうじいちゃんたちばかりですからね、田舎は。」
 「お金はね、縁を切るものだと思うの。はいて渡せばそれで終り。でも、『結い』はあげたときに、ああ、何か自分にも返ってくるかも知れないと思うのね。その楽しみがあるの、これには。」
 「これは芋煮会の時の手伝いでもらった結い券ですけど、『ありがとう』って書いてあるんですよ。」
 「久木野の石積み名人の話は聞いたんですが、そういう技術を学んだりするのにも『結い』のありがたいのやりとりが使えればと思うんですけど。」
 「私はとてもだめだわ、声をかけるのもできないし、多分声もかからないだろうなんて勝手に思いこんでいたのが、声がかかって、しかもこんなになっていた。次は結い券を使う方に…とっています。巡り巡ることに結い券の意味も生まれると思いますので」
 「水俣もやい通貨」は人と人の新たな関わりをありがとうが結んでいる。



もやい通貨を使って

【神田・岩本町の藍染稲荷】

藍染稲荷講元 藤田茂一

わたしがこの町内にお世話になって65年、亡くなった親父からは、かれこれ90年近くになりますか。
 当時は「神田大和町」でした。震災前は、お菓子作り屋・問屋さんの町だったようですが、わたしが物心がついた頃には、わずかに名残が感じられる程度になってしまっていて、ご近所は、八百屋さん、肉屋さん、豆腐屋さんといったお店が、鍛冶屋さん、塗師屋さん、かしろの齋といった職業の方々であふれた、活気のある町内でした。
 うちの商売はブリキヤで、出前を頼む時も「ブリキヤの藤田」と頼むのです。親父は、当然中学を終えたら、「あとを継がせる」腹だったようです。ところが、どうゆうわけか、わたしは普通高校にはいってしまいました。どうもこの頃は、「ブリキヤ」という職業、「職人」という肩書きに、コンプレックスを持っていたようで、「家の職業」を記入するのに「板金加工業」と書いていました。そんな結果が、「大学」に入り、「会社員」になってしまいました。
 会社は銀座の「三愛」でした。当時アイデア社長・経営の神様、市村清が社長だから、というだけで入社したわけです。入社して、「女、子どもを相手にした」、間違っても「大の男が一生の仕事とする職業」ではないと思ったものです。
 婦人衣料品の「小売業」で「商い」をされていて教えられたことは、「世の中は」「お客様あっての」「お客様のために」ということです。
 親父は、どうも根っからの「職人」だったようで、仕事は「やってやるもの」、出来上がったら、頼んだ方が「引き取りに来るもの」と思っていて、お得意様は頼みに来ることを怖がったそうです。
 そんな親父が、戦後、今の土地を譲り受けるについては、「藍染稲荷」さんが含まれていて、「お稲荷さんをお守り下さい」ということが、地主さんの一つの条件だったそうです。
 もともと「藍染稲荷」は、「路地のお稲荷さん」としてご町内の皆さんの信仰の対象だったようで、戦時中、町内から出征兵士の方があると、総出で武運長久を祈り、お送りしたそうです。
 その昔、付近を流れていた藍染川から、ご神体が現れたのをお祀りしたとゆうのが由緒で、大和町に火事がないのは「お稲荷様のご利益」である、と町内のお年寄りには言っていました。往時は、ご町内を挙げてのお祭り、お子様たちにはお菓子をお配り、屋台も出たりの大変な賑わいだったと聞かれました。
 そんなこんなで、「藍染稲荷神社」は「藤田の土地」にございますが、「ご町内のお稲荷様」であると思って、親父もわたしも、お守りをさせていただいて参りました。以来、紆余曲折はございましたが、二年に一回ご祭礼をしていただき、させてさせていただいております。お社はもとより、鳥居、柵など、すべて有志の方々、ご町内の方々の浄財で残されたものです。
 一方、世の中では、土地の有効活用でしょうか、路地をつぶしてしまい、ビル化が進んで、もともとは「路地」のお稲荷さんが、「袋小路」のお稲荷さんになってしまいました。

藤田家も、平成五年にビル化をすることに致しまして、迷いましたが、「お稲荷さん」には「手をつけないで」とお願いし、設計していただき、建てさせていただきました。戦前、戦後を通じて、「そのようなお稲荷さん」だったことを、これからも大切にしたいからです。従って、いまでも「そんなお稲荷さん」です。
 今年も、四月二十日が二年毎の「ご祭礼」の日で、神田明神の神主さんに祝詞を奏上して頂きました。地続きの方々や信心篤い有志の方が、お世話になっていただき、ご町内の方々に呼びかけ、ご参拝いただきました。今はお子さんやお孫さんを連れてお参りされるご立派な社長さん、旦那さん方も、子供の頃は並んでお参りしてお菓子をいただいています。おかげさまで、今年もいつにも劣ることのない賑わしのお祭りができて感謝です。
 このように、「親」から「子」、子から「孫」へと受け継がれて、確かに、町の姿は変わりましたが、「お稲荷さんのお祭り」という「おそれ、うやまう、ねがう」という「文化」は、脈々と受け継がれております。そんな「お稲荷さん」に守られて、「これまでがあり」「これからもある」のだと、有難く、感謝しております。
 今は「職人」を尊敬し、「その息子」を誇りにしていますが、その「職人の親父」と「会社員の息子」が、「ブリキヤ」は受け継ぎそこないましたが、「お稲荷さんの講元」は、親父から受け継がせていただき、「おもり」させていただいておりますのも、すべて大きな「ご縁」をいただいていることとっております。これからも、いただいた「ご縁」を大切に参ります。



ビルの谷間の藍染稲荷 (右から4人目が藤田さん)

■国家通貨と地域通貨

欧州共通通貨ユーロの誕生に深く関わったベルナルド・リエター氏は、今後、持続可能な豊かさを実現するためのシステムとして、「国家通貨」と「補完通貨」からなる経済の全体象を示しています。両方が互いに補完・共存することによって豊かさが生まれてくると言います。

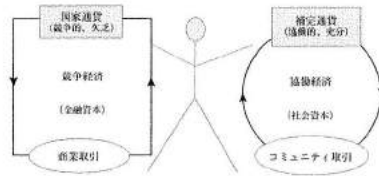
国家通貨は、言うまでもなく、私たちが現在使っている貨幣制度で、これは競争経済に基づき世界市場を動かしています。「24時間365日フルタイムに活動するグローバルビジネスセンター」を目指す丸の内は、まさにこの国家通貨が活躍する新しい舞台になるはずで

す。私たちは、今の時代を生きる以上、このグローバルに展開する経済活動から逃れることはできません。しかし、そこから弾き飛ばされて山積みになっている、福祉、教育、文化、環境、エネルギーなどの問題に目をつぼっている訳にもいなくなっています。競争ではなく、「協働」によって初めて手に入るもの、ここに使われるのが補完通貨(地域通貨)です。

地域通貨は世界大恐慌の後、1930年代から世界中で試みが続けられ、今も世界で3000以上が流通し、日本でも100はあるとされています。おうみ(滋賀)、かもん(神戸)、ピーナッツ(千葉)、優(高知)、がや(世田谷)、COMO(多摩)…、地域によって単位も、レートも、方式も様々で、水俣のもやい通貨もその

ひとつです。

地域通貨の一番の特徴は、国家通貨が世界に羽ばたき、なかなか帰ってこないのに比べ、いずれも「地域で循環する」ように「設計」されていることです。



補完通貨による経済の全体像 (ベルナルド・リエター『マネー崩壊』より)

■ヒントは「ご縁」や「おかげさま」に

人間は、本質的に他者と支え合う社会的な存在ですから、「商い」は人間の根源的な活動で、幸せや豊かさをもたらしてくれるものでなくてはなりません。

丸の内と神田は同じ千代田区にあり、しかも隣接している地域ですが、全く異なる文化があります。

その千代田区の人口は意外なことに39,473人(夜間人口)で、31,379人の水俣市とあまり変わりません。とは言え、環境も条件も全く違う水俣と神田のお2人ですが、守り育てようとされているのは共通して「地域」でした。福祉も、自然エネルギーも、ゴミの問題も、地域を離れては考えられません。

ますますグローバル化が進む一方で、それぞれの地域が独自の循環システムを持ち得れば、多様性に富んだ厚みのある

面白い時代を次世代に手渡すことができるように思えます。

そして、現代の多様性を包括するシステムは、お稲荷さんを通して語られた「ご縁」や「おかげさま」、もやい通貨の背後にある「ありがとな」にヒントが隠されているのかもしれませんが、それは、中世の昔から私たち日本人が引き継いできた「商い」の心のように思われます。

■30分先が見える

『モモ』には、時間を司るマイスター・ホラのところにモモを案内する、カシオペアというカメが登場します。灰色の男たちがモモを探し回る町中を、悠々と進んで行けたのは、カシオペアが30分先を見通せる能力を持っていたからでした。

芸術はこのカメのような役割をもっているのではないのでしょうか。灰色の街を時間泥棒から解放するため、変わりつつあるシステムの実現に向かって、30分先を顕在化していく…。

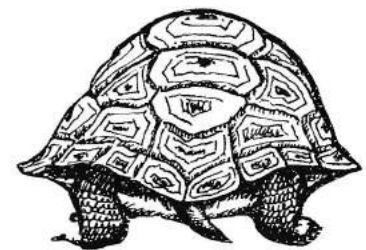
中世の市において、aaca会員のルーツと見られる人々は、異界(神々の世界)と人間界を結ぶ特別な能力をもつとされていました。今の時代にモノづくりに関わる私たちは、一体どのような形態の都市を次世代に手渡そうとしているのでしょうか？

(アートアドミニストレーター 露口典子)

原稿をお寄せ下さった恵良様、遠藤様、藤田様に心より感謝申し上げます。



生まれ変わる丸ビル(東京駅前)



カメのカシオペア (ミハエル・エンデ『モモ』より)

【aca通貨の提案】

ここ100年、アートも市場で売買されるため、国家通貨に縛られてきました。

パブリックな場の創造には地域通貨が相応しいのかもしれませんが。

協会内の通貨を試みるのはいかがでしょうか？単位はaaca(アーカ)、芸術の協働システムです。ご意見はE-mail: fuba@pop01.odn.nd.jp 露口まで

【お薦め資料】

地域通貨にご興味のおありの方は → 『マネー崩壊』『エンデの遺言』『エンデの警鐘』など

中世にご興味のおありの方は → 『異郷を結ぶ商人と職人』『中世商人の世界』『「商い」から見た日本史』など

■国家通貨と地域通貨

欧州共通通貨ユーロの誕生に深く関わったベルナルド・リエター氏は、今後、持続可能な豊かさを実現するためのシステムとして、「国家通貨」と「補完通貨」からなる経済の全体象を示しています。両方が互いに補完・共存することによって豊かさが生まれてくると言います。

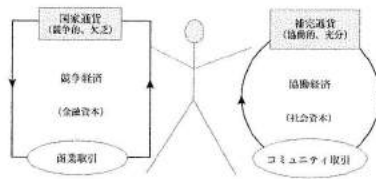
国家通貨は、言うまでもなく、私たちが現在使っている貨幣制度で、これは競争経済に基づき世界市場を動かしています。「24時間365日フルタイムに活動するグローバルビジネスセンター」を目指す丸の内は、まさにこの国家通貨が活躍する新しい舞台になるはずで

す。私たちは、今の時代を生きる以上、このグローバルに展開する経済活動から逃れることはできません。しかし、そこから弾き飛ばされて山積みになっている、福祉、教育、文化、環境、エネルギーなどの問題に目をつぶっている訳にもいなくなっています。競争ではなく、「協働」によって初めて手に入るもの、ここに使われるのが補完通貨(地域通貨)です。

地域通貨は世界大恐慌の後、1930年代から世界中で試みが続けられ、今も世界で3000以上が流通し、日本でも100はあるとされています。おうみ(滋賀)、かもん(神戸)、ピーナッツ(千葉)、優(高知)、がや(世田谷)、COMO(多摩)…、地域によって単位も、レートも、方式も様々で、水保のもやい通貨もその

ひとつです。

地域通貨の一番の特徴は、国家通貨が世界に羽ばたき、なかなか帰ってこないのに比べ、いずれも「地域で循環する」ように「設計」されていることです。



補完通貨による経済の全体像 (ベルナルド・リエター『マネー崩壊』より)

■ヒントは「ご縁」や「おかげさま」に

人間は、本質的に他者と支え合う社会的な存在ですから、「商い」は人間の根源的な活動で、幸せや豊かさをもたらしてくれるものでなくてはなりません。

丸の内と神田は同じ千代田区にあり、しかも隣接している地域ですが、全く異なる文化があります。

その千代田区の人口は意外なことに39,473人(夜間人口)で、31,379人の水保市とあまり変わりません。とは言え、環境も条件も全く違う水保と神田のお2人ですが、守り育てようとしていたのは共通して「地域」でした。福祉も、自然エネルギーも、ゴミの問題も、地域を離れては考えられません。

ますますグローバル化が進む一方で、それぞれの地域が独自の循環システムを持ち得れば、多様性に富んだ厚みのある

面白い時代を次世代に手渡すことができるように思えます。

そして、現代の多様性を包括するシステムは、お稲荷さんを通して語られた「ご縁」や「おかげさま」、もやい通貨の背後にある「ありがとな」にヒントが隠されているのかもしれませんが、それは、中世の昔から私たち日本人が引き継いできた「商い」の心のように思われます。

■30分先が見える

『モモ』には、時間を司るマイスター・ホラのところにモモを案内する、カシオペアというカメが登場します。灰色の男たちがモモを探し回る町中を、悠々と進んで行けたのは、カシオペアが30分先を見通せる能力を持っていたからでした。

芸術はこのカメのような役割をもっているのではないのでしょうか。灰色の街を時間泥棒から解き放つため、変わりつつあるシステムの実現に向かって、30分先を顕在化していく…。

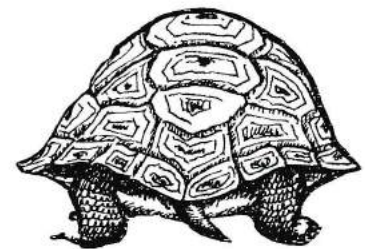
中世の市において、aaca会員のルーツと見られる人々は、異界(神々の世界)と人間界を結ぶ特別の能力をもつとされていました。今の時代にモノづくりに関わる私たちは、一体どのような形態の都市を次世代に手渡そうとしているのでしょうか？

(アートアドミニストレーター 露口典子)

原稿をお寄せ下さった恵良様、遠藤様、藤田様に心より感謝申し上げます。



生まれ変わる丸ビル(東京駅前)



カメのカシオペア (ミヒヤエル・エンデ『モモ』より)

【aca通貨の提案】

ここ100年、アートも市場で売買されるため、国家通貨に縛られてきました。

パブリックな場の創造には地域通貨が相応しいのかもしれませんが。

協会内の通貨を試みるのはいかがでしょうか？単位はaaca(アーカ)、芸術の協働システムです。ご意見はE-mail: fuba@pop01.odn.nd.jp 露口まで

【お薦め資料】

地域通貨にご興味のおありの方は → 『マネー崩壊』『エンデの遺言』『エンデの警鐘』など

中世にご興味のおありの方は → 『異郷を結ぶ商人と職人』『中世商人の世界』『「商い」から見た日本史』など

時代の華一輪



aaca理事
(株)日建設計都市建築研究所所長
OGURA YOSHIAKI
小倉 善明
東京都文京区後楽2-1-3
TEL 03-3813-3361

新宿NSビルで、世界最大級の大アトリウムにチャレンジすることになったのは、ちょっとした経緯があった。この案は企画案の検討時点で現行の法規のもとではまず無理であり、工事費も高くなるから、断念することになった。別案を、当時の広世現・日本生命社長にプレゼンテーションをした時のことである。広世社長の「他には案がなかったのですか」の一言から話が変わった。私が何故か、あきらめたはずの案の模型を持って、それを見せると、「これは良い。難しいほうの案をやりましょう。」とのこと。これから苦闘が始まった。

当時、アトリウムという言葉も使われていなかったし、1969年-1970年にかけて大幅な防災関係の法令改正が行われ、吹き抜け禁止というのが建築界の

通り相場であった。3階以上の吹き抜け部分に対しては、他の部分との間に防火、防災区画を構成させなければならなかった。この規定により当時アトランタのハイアットリージェンシーのような、アトリウムは法令上認められないことになったのである。

ロノ字型平面形に対しても、超高層ビルの平面系として問題があると、行政側から指摘があった。吹き抜け空間は、その空間の階数30階×アトリウムの1階床面積分をアトリウム面積として加算しなさいという解釈まで出された。当時、アメリカには、多くのアトリウム建築が出現していた。日本で出来ないはずはないと思っていたが、何とか行けそうだというまで2年近くかかった。計画をしたアトリウムは、23万立方メートルという大気

積のものであったから、万が一火災が発生して、熱と煙がガラスを破ってアトリウムの中に出た場合でも、アトリウムは屋外空間と同様の性状を示し、避難や消火活動に支障がない事をシュミレーションすることが出来た。その結果を持って防災性能評定を受け、日本で始めての本格的なアトリウムが出現した。

できた空間の高さは下の広場から、ガラス屋根まで130メートル、夏は広場では気温26度近辺でも、最上部は、60度を越す。竣工当時、夜のコールドドラフトにより、振り子時計が、毎晩、丑三つ時に止まることがあった。このことは、理由を探るために徹夜で見張るまでは、分からなかったのである。



(写真) アトリウムを見下ろす。床のデザインは片山弘氏による。

時代の華一輪



aaca理事
(株)竹中工務店 専務取締役
MURAMATSU EIICHI
村松 映一
東京都中央区銀座8-21-1
TEL.03-3542-7100

—東京宝塚劇場—

石川純一郎の意匠設計による旧東京宝塚劇場は収容人員2800名余りのレビュー大劇場として昭和9年1月1日に開場している。これに先立ち大正14年に本拠地（兵庫）の宝塚大劇場が日本初の3000名収容の大劇場として開場している。収容人員の多さは宝塚歌劇の生みの親である小林一三翁の「一般庶民の高尚なる娯楽」の経営方針に依るもので、芝居を広く国民のものにするためより多くの人々に見せようとする理念に基づいている。このことは舞台と観客の親密さを助長するために設けられている「銀橋」と共に、どこからも格差なく平等に良く見える客席空間の指向へ展開し、平成6年改築された本拠地の宝塚大劇場・新東京宝塚劇場へと継承されている。翁のこ

の理念は19世紀のワグナーと建築家ゼンパーによるパイロイト祝祭劇場の思想とも共通している。

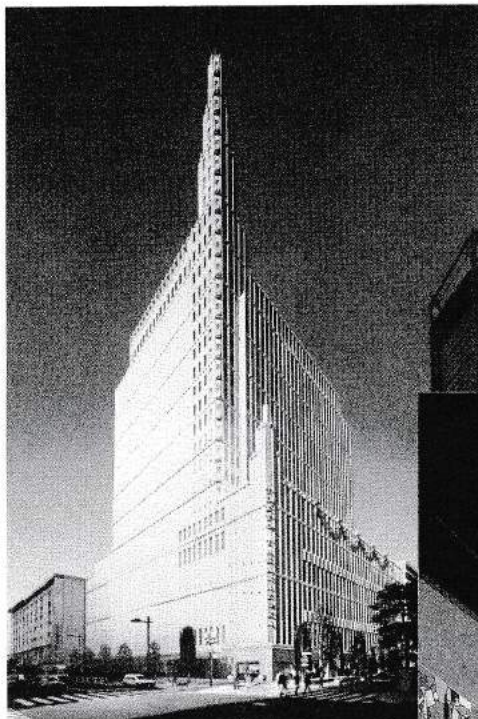
宝塚歌劇団は約400名の女性演者のみからなる劇団であり、その魅力は澁刺とした女性が醸し出す美しさ、躍動感、生命感であり、非日常的夢の世界を演じ現在も驚異的ともいえる高稼働率を維持し続けている。

そこで宝塚歌劇が果してきた時代を超えて変わることのない概念を建築作品としてどのように表現したかを簡潔に紹介する。

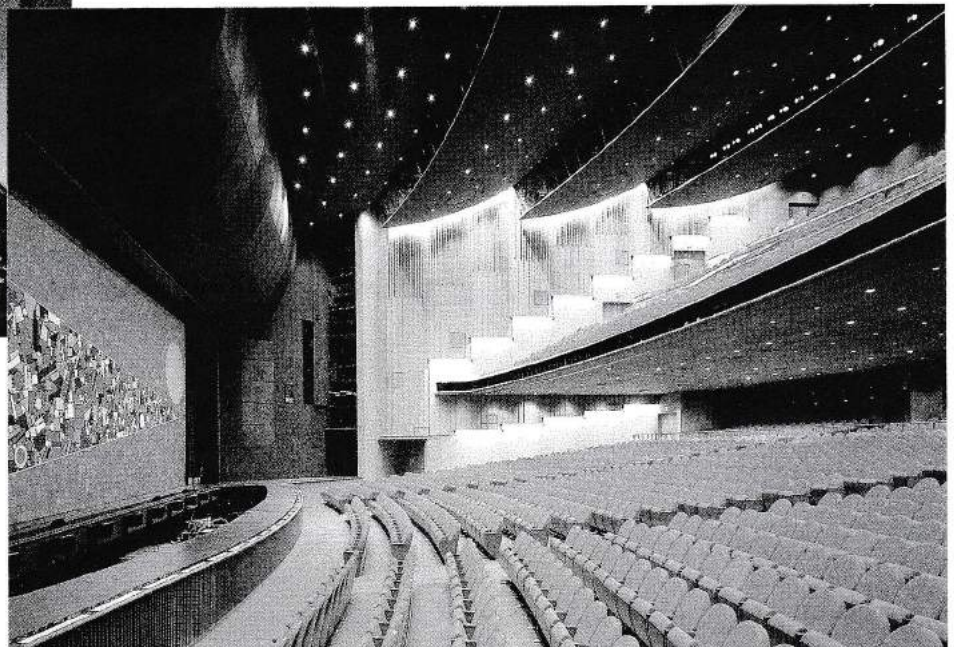
新劇場は地下31M以上の階を賃貸事務室に、地下2階に旧劇場にあったスカラ座を復活させ、残った大部分の空間が本拠地と同等の宝塚歌劇専用の施設とな

っている。外観は高層部コーナーに塔を設け都市のランドマークとし、全体が塔に向けて階段状に上昇していく躍動感のあるシルエットとし、淡いパープル色と柔らかなベージュ色の色彩と繊細なディテールが醸し出す華やかさと、面出薫氏によるライトアップの夜景が相俟って、21世紀の幕開け「2001年1月1日柿落し」を飾る相応しい都市のステージとしての象徴性と祝祭性をもたせている。赤・白・光の織りなす空間が劇場へと誘い、赤・グレーのモノトーンの色と光の演出が幻想的で臨時感のある劇場空間へと人々を招き入れる。

笹戸志津子氏のブロンズ像が演者を象徴して語りかけるように広場に佇んでいる。



外観（南東面）



東京宝塚劇場客席





aaca会員
造形作家
MACHI KIIKO
間地 紀以子
中野区野方4-37-6
TEL. 03-3385-0385

「観るアートから参加するアートへ」

美術作品を美術館や画廊から解放し街角や公園、農村地域など屋外に設置し、より生活空間に近い場で観てもらおうとするスタイルは最早珍しいものではなくなりました。一方、作品を制作するのも作家個人のみならず、2人以上の共同制作、謂ゆるコラボレーションが多くみられるようになりました。これ迄の共同制作では、作家とその制作を手伝うボランティアというかたちが一般的でした。しかし近年、一般の人々を、自主的に発言し参加するメンバーとして考える、という動きが起って来ました。美術の観賞者であった人々が、アートの創り手になりコンセプトから共に考え、作品決定し共同制作することにより、創る喜び苦し

みを共有し、アートをより身近に感じ、より大きな充実感を得る事が出来るものと考えます。ひとりではとても不可能と思える様な大空間を使ってのインスタレーションや大きなスケールの作品、思いもかけない様々な発想など、コラボレーションの可能性は大きく広がっています。

：1999年から私が関わった「グループ・等 (RA)」の活動の記録を御報告します。

：1999年 光る森 参加57名
(写真⑧) 3700㎡の雑木林に白布4000mを巻き、森の健康を願う。

：2001年 光る川 参加37名
(写真⑨) 川巾20mの水面を流域100

mにわたり青布8000mをはりわたし美しい川を願う。

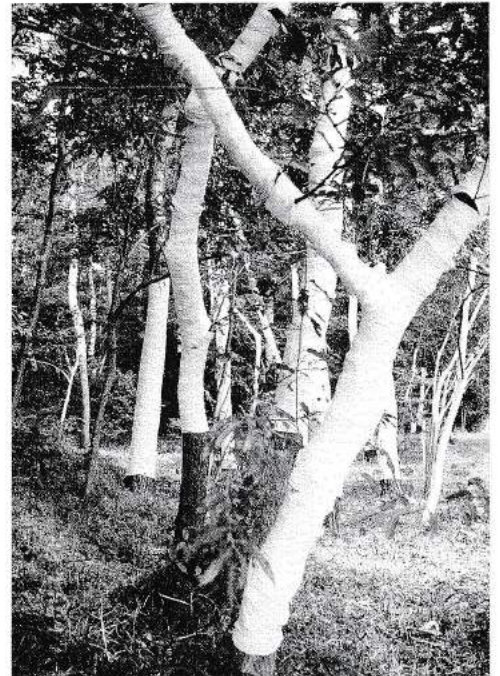
：2001年 水の塔 参加37名
(写真⑩) 1000本のペットボトルに水を入れタワー状に組み、鉄骨フレームから吊り下げ、水の循環を表現。夜間ライトアップ。以上、茨城県。

：2001年 水琴窟プロジェクト 参加11名。

山里の静寂の村の広場に水琴窟を置き人々のコミュニケーションの場とする。新潟県。

：2002年 我孫子野外美術展 (10月～11月) 参加予定。千葉県。

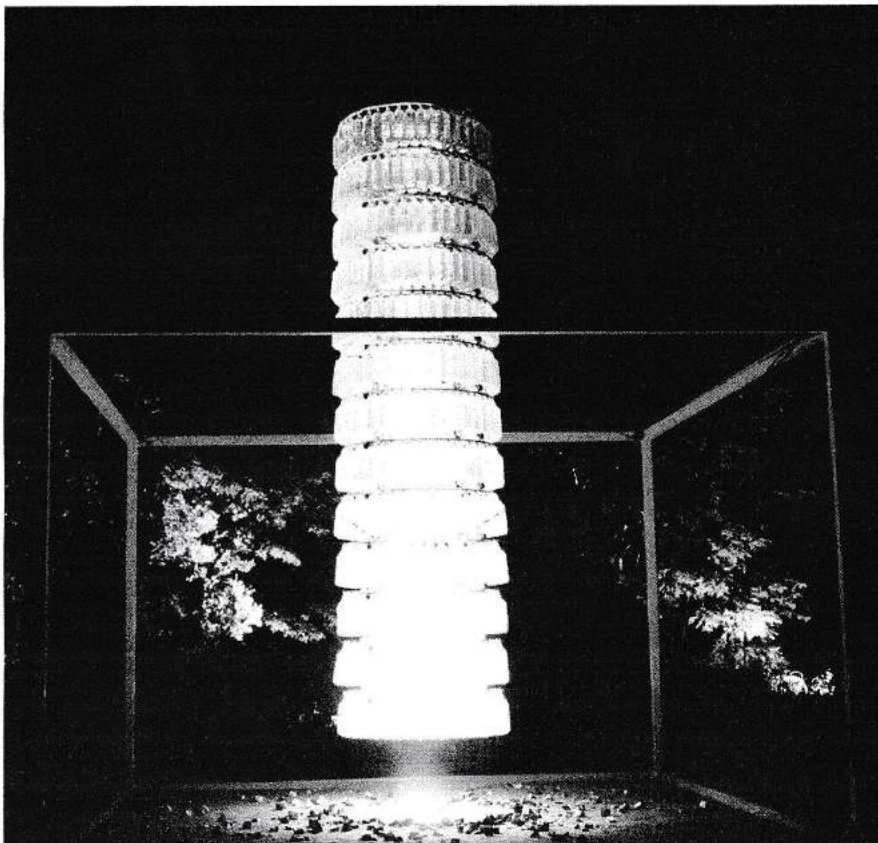
右上●⑧光る森



右下●⑨光る川



●⑩水の塔





aaca会員
美術作家
KIYATAKE SADAŌ
喜屋武 貞男
千葉県柏市宿連寺446-21
TEL 04-7131-3537

「海からの幻想」

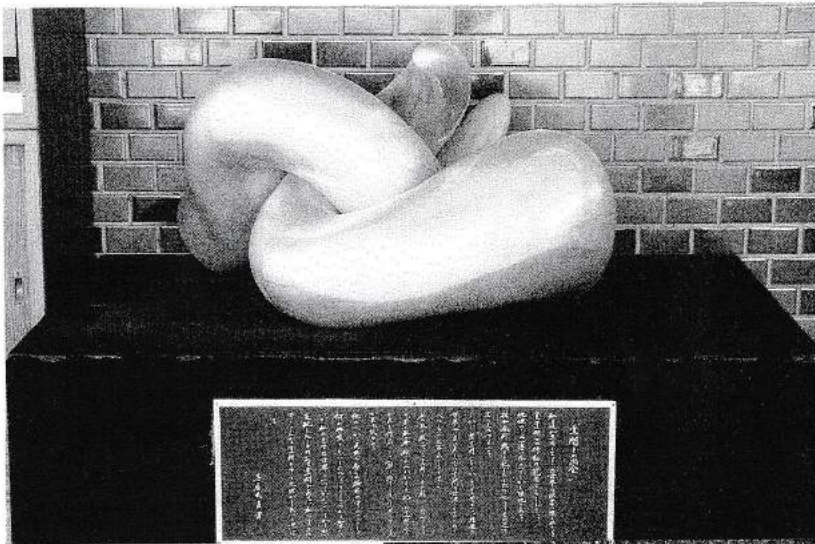
高校教師を定年退職してから長年の夢だったイギリス、ベルギー、スイスへ旅行し、ベルギーのアントワープの彫刻公園を見学した時に撮影したスライドを皆様にお見せしました。沢山の興味深い作品があり、^{まちなか}街中にある広い公園で、しかも入場無料です。日本では箱根彫刻の森美術館の様に山の中にあり、有料なのと比べると驚きです。国宝級の物に接していると、それ以上の物を作らないと面白くないし、見る側もそうでないと思いません。子供の頃から遊び場に本物の美術品があるのはすごい事だし、ベルギーではそれが実現している事が感動的でした。

次に私の彫刻作品の幾つか^{いく}を紹介しました。学校に設置している物が大半で、彫刻の面白い所は実際の彫刻は小さい物でも想像力でいくらでも大きな世界を考える事ができる点です。

地球規模で物事を考えると、ある所から先は全く違った様相になります。直線を地球上で作ると赤道の様に^{たいりゅう}大輪になってしまいます。平面でも赤道で切断し、南北に分けて、北極点で十字に南極点へ向って切断すると、そのひとかけらは球の1/8になります。そのひとつの三角形は球体三角形で直角が三つの三角形になります。その三角形の各辺の中点に印をつけて線を引くとより小さな三角形が

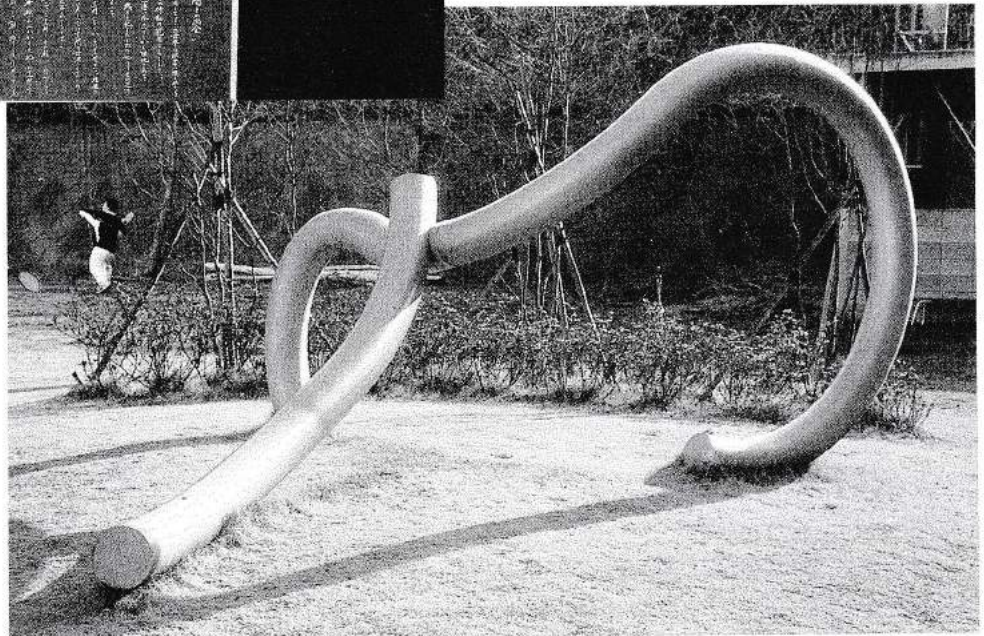
でき、それをくり返して行くと平面に近い三角形になります。内角の和は270度から180度に近くなります。

私達人間はどうしても自己中心の物の見方、考え方になります。陸地で生まれたので陸から見た海の見え方になり、魚は食糧として見てしまいます。人間中心で陸側からの考えでは島の数だけナショナリズムがあり、対立があり、戦争があります。海は地球全体を一つの面で覆っています。人間中心で物事を考えずに魚の気持ちで海側から陸側を見るという視点を持ちたいと思います。そうする事が民族紛争も国旗、国歌の問題もないという「海からの幻想」なのです。



「ん」(アルミニウム)
千葉県立我孫子高校

「や」(アルミニウム)
千葉県立柏高校



トピックス



aacajp情報委員会副委員長

ISHII HIROMI
石井 博美

東京都港区芝5-26-20建築会館6F
TEL 03-3457-7998

ホームページの立ち上げ と情報委員会の活動報告

情報委員会はこの5月で約1年間の活動をしてきた事になります。

3月末にはホームページのフレームが完成し、5月24日の第14回総会では、出席された会員の皆様への紹介と説明が行われました。その場に居られなかった会員の皆様にはこの誌上で意図と概略をお話し、百聞は一見の如きでホームページにアクセスして頂ければと思います。

調査研究委員会IT部会の提案による「ITアンケート」の実施(会報a#34に掲載)により、情報機器の導入による世界への情報発信と会員間のコミュニケーションの活性化は多くの会員の希望である事が明らかになりました。このことを受けて、一般に「IT化」と呼ばれるこの改革の実施に向けて新たな委員会として発足したのが情報委員会です。

情報委員会設置の目的はここ数年の間に日本の社会の中で急速に発達した情報化による社会そのものの変化に対し、協会としての対応をどう考えるか、どういう具体的な施策を実施するかという事です。「ホームページの立ち上げ」「事務局

のIT化」「会員の増強」が緊急の課題として挙げられました。本来で考えれば各々「広報委員会」、「運営委員会」、「会員増強委員会」の活動内容ですが、早急な社会への対応と協会全体の方向性に関わる内容である事から「情報委員会」という形での対応が考えられ、理事会によって承認されたわけです。

「会員の増強」については会員増強委員会からの要請が再三出されていますが、協会をホームページという新しい言語に翻訳する事で、会員増強の一端として相乗的な効果を期待出来るのではないかと考えています。またこのツールが若い世代のツールであると言うことから若い会員世代の増強も期待できると思われ

ます。「事務局のIT化」はホームページの設置に伴うインフラとしての必須の条件です。加えて理事会・委員会・会員の熱心なボランティアがあってはじめて世界に発信できる協会のホームページが実現できると考えています。

「ホームページの立ち上げ」によって情報委員会には「ホームページの運営」という次の課題が課されています。ここからは、情報委員会の活動の枠内では収

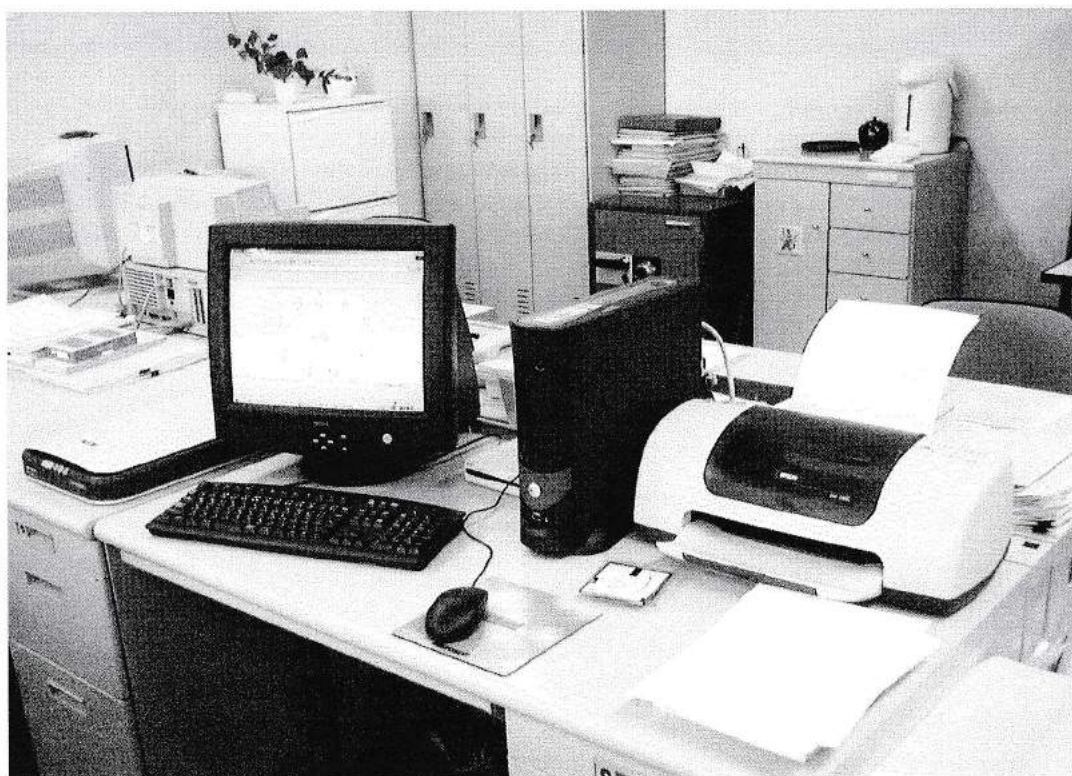
まらない内容になります。情報委員に各委員会からの代表の方々に入っているのも「ホームページの運営」は協会全体で取り組まない限り貧弱なものにおわると考えるからです。

ホームページの設置にあたってその内容(コンテンツ)を検討するというのが最初の基礎的な作業となりましたが、これは協会全体の組織・活動を検討するということでもありました。その中から魅力的な部分を発見してホームページに載せることで協会の理念と存在意義を世界に発信し、会員の誇りとなり、交流を活性化させるような役割と効果をホームページに求めたからです。

新しい時代の新しいツールで慣れないことなのですが、協会の活性化を計りしつかりとした方向性を築くべく情報委員会一同努力致しますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。また、会員の方々の積極的なホームページへの参加とともに、運営に協力して下さるボランティア精神溢れる会員の方々を募集しています。

協会HPアドレス <http://www.aacajp.com>

協会e-mailアドレス info@aacajp.com



世界のトップブランドを揃えた

ツナシマ
（冷蔵庫・厨房）シリーズ

「快適」「ゆとり」「安心」を実感できるトップブランドの数々。
格というものがありません。

豊かな緑、歴史・文化と調和した愛宕グリーンヒルズフォレストタワー。国内最高レベルの耐震性能と閑静な周辺環境に調和したエクステリア、自然素材を活かしたインテリア、内外の单身ビジネスマンからファミリー層まで、多様なライフスタイルに応えた最先端のハードとソフトが完備されています。この地上42階建超高層住宅棟の各戸に、ツナシマ商事が確かな実績と選択眼でセレクトした、アプライアンスが採用されました。優れた性能、洗練されたデザイン、使い心地の良さ、環境への配慮、アフターケア——キッチン、ランドリーに最適のパートナーです。

W White Westinghouse

ホワイト・ウエスティングハウス社は、110年の歴史を誇り、常に米国の家電業界をリードしてきました。性能・省エネ・耐久性を考慮したニューモデルを次々に開発・製品化、輝かしい実績と信頼を得ています。特に「暮らしの洗浄」にこだわる開発コンセプトは高く評価され、米国の公的機関も品質を保証しています。



全自動食器洗い乾燥機



ドラム式全自動洗濯機/乾燥機

Amana

アマナ社は1842年にアメリカに移住した、ゲルマン民族の末裔が設立した歴史と伝統のある大型冷凍冷蔵庫メーカーです。伝統と実績に裏付けられた開発力・技術力、優れた機能性を追求して作られた風格と、環境と暮らしを考えた省エネルギー性能が、ヨーロッパ諸国を始めとする世界各国で高く評価されています。



大型冷凍冷蔵庫

Magic Chef

アメリカでガスレンジといえば、マジックシェフ。マジックシェフの歴史が築いた調理のコツの全てが活かされています。国産製品には見られない個性的な機能・特徴の数々。水分やおいしさを包み込む強火から、愛情と時間をかけて煮込むとろ火まで、火力自在のバーナーがお望みの火加減で見事に調理をこなします。



ガスレンジ

上記の他に、北欧のメーカーでASKO（アスコ）社や他メーカーの製品も取り扱っています。製品のお問い合わせ・カタログのご請求は

輸入販売元 **株式会社 ツナシマ商事**

本社/東京ショールーム 〒113-0034 東京都文京区湯島3-20-12 TEL 03-3833-1331(代)
大阪営業所/大阪ショールーム 〒550-0006 大阪市西区江之子島1-7-3 TEL 06-6448-4111(代)

Homepage

<http://www.tsunashimashoji.co.jp/>
ツナシマ商事が取り扱う、コーディネート・厨房機器の詳細な情報や仕様がご覧いただけます。

Show Room

本社・大阪ショールームへお越しください。係員がお客様のご質問にお答えします。また、製品のテストも行えます。